

2024/7/29

ヘボン式ローマ字の変遷 ー日本式ローマ字との比較を通してー

木村 一

1. はじめに

日本語をローマ字で記すにあたり、文化庁の「ローマ字のつづり方」の解説には「第1表にはいわゆる訓令式のつづり方、第2表にはヘボン式（表の上から5列目まで）と日本式（6列目以下）のつづり方のうち訓令式と異なるものだけを掲げてあり」とある。以下、各行に第2表を組み込む。

<ヘボン式>

1.1	サ行	sa	<u>shi</u>	su	se	so
1.1	シャ行	<u>sha</u>		<u>shu</u>		<u>sho</u>
1.2, 3	タ行	ta	<u>chi</u>	<u>tsu</u>	te	to
1.3	チャ行	<u>cha</u>		<u>chu</u>		<u>cho</u>
1.4	ハ行	ha	hi	<u>fu</u>	he	ho
1.5	ザ行	za	<u>ji</u>	zu	ze	zo
	ダ行	da	<u>ji</u>	zu	de	do
1.5	ジャ行	<u>ja</u>		<u>ju</u>		<u>jo</u>

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dya
		dya	dya
kwa			
gwa			
			wo

<日本式>

1.6	ダ行	da	<u>di</u>	<u>du</u>	de	do
1.6	チャ行	<u>dya</u>		<u>dyu</u>		<u>dyo</u>
1.7	クワ行	<u>kwa</u>				
1.8	グワ行	<u>gwa</u>				
1.9	ワ行					<u>wo</u>

https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/roma/index.html

2. ヘボン式と日本式

発音を意識している（例、キリシタン資料など）のはヘボン式である。英語話者に向けたものと言えよう（母音は注2参照）。

五十音図を意識している（例、蘭学など）のは日本式である。四つ仮名など（例、ダ行・チャ行）の仮名遣いにも対応可能となる。

なお、キリシタン資料、蘭学のローマ字つづりはその後を考えるにあたり、先駆として重要である。また、ローマ字つづり全般に言えることではあるが、人により、さらに（同一人物でも）著作などにより、ヴァリエーションがあることには留意しなければならない。

ヘボン式の子音は2字が生じている。一方、日本式は、各行の子音を同じにし、直音において子音1字+母音1字で1音を表している（拗音はyをはさむ）。

<タ行>

ヘボン式	ta	chi	tsu	te	to
訓令・日本式式	ta	ti	tu	te	to

- ・ タ行→た・て・と チャ行→ち ツァ行→つ ※ 3つからなる ([表 1] 参照)
- 16C 初頃に [ti]・[tu] から [tci]・[tsu] に変化

[表 1]

	a	i	u	e	o
t [t]	た	(ティ)	(トゥ)	て	と
ch [tɕ]	ちゃ	ち	ちゅ	(チェ)	ちょ
ts [ts]	(ツァ)	(ツイ)	つ	(ツエ)	(ツォ)

※ () は主に外来語のカタカナ表記で用いられる

3. ヘボン式の祖形

和英和辞書『和英語林集成』「手稿」(1860 年代前半・和英のみ (K 部途中まで))・「初版」(1867)・「再版」(1872)・「3 版」(1886) (羅馬字会) から J. C. ヘボンのローマ字つづりの変遷が確認できる (数例を以下に示す ([表 2] 参照))。ただし、それぞれの発音の異なりをローマ字つづりですべて示している訳ではない (例, hi など¹⁾)。

[表 2]

	手稿	初版	再版	3 版
う	u	u, wi	u	u
え	ye , e	ye	ye	e , ye
お	o , wo	o	o	o
を	o , wo	wo	wo	wo
し	shi , sh', sh	shi, sh'	shi	shi
ち	chi , ch'	chi	chi	chi
じ	ji , j	ji	ji	ji
ぢ	di, gi, ji			
す	sz , s', s	sz	su	su
つ	tsz, ts', ts , tz	tsz	tsu	tsu
ず	dz , zz	dz	dzu	zu
づ	dz			
せ	she , se	se	se	se
ぜ	je , ze	ze	ze	ze
ひゃ	hiya, h'ya	hiya	hiya	hya

<https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei/roma.html> (一部のつづりを掲載)

※ 太字は使用率の高いもの

※ 助詞「は」 wa, 「へ」 ye, 「を」 wo となる。

¹ 日本語母語話者は全て同じ「ん」としてとらえ、違いは意識していないと言えよう。ヘボン式では n と m は区別するが, [ŋ] などは区別しない (別の人物・著作によるものでは区別するものもある)。

- ・ sz, tsz, dz の z から u へ²
- ・ 長音・撥音・促音，拗音の表記
- ・ 母音の無声化

4. まとめ

ヘボン式（細部は個々にさまざまであるが）を軸に記すが，日本式・訓令式にも通じる点がある。

- ・ ウ列長音（Ū または Ū, U, UU）とオ列長音（Ô または Ō, O, OO, OO と OU, OH が主なところであろう）
 - 表示（出力）の方法
 - ア列，イ列，エ列の扱い
- ・ 撥音・促音・四つ仮名
- ・ 人名・地名への対応
- ・ 外来語の拡張
 - 例，スイとシ ティとチ トゥとト ズィとジ ディとヂ ドゥとド

日本語をローマ字で表記するにあたり，どこまで・どのように示すのかの検討と並行して，全体を見渡しながら何ができて・できないのかのシミュレーションが必要である。諸種のローマ字つづりにはそれぞれに特性があり，優劣の問題ではない。何を重視し，何を示したいのかが重要である。

※ 詳細および参考文献は本委員会（ローマ字小委員会（第2回））の参考資料5「日本語のローマ字表記における長音符合の扱いなどについて―『和英語林集成』初版(1867)を資料として―」(2024/7/29)を参照。

² オランダ語（オランダ）式は oe（蘭学では u とするものがある），フランス語（フランス）式は ou，英語（イギリス）式は oo とする傾向がある。